



TITLE:

サル類保健飼育管理施設(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

千葉, 敏郎; 松林, 清明; 後藤, 俊二; 松林, 伸子

CITATION:

千葉, 敏郎 ...[et al]. サル類保健飼育管理施設(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1981, 10: 27-29

ISSUE DATE:

1981-01-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162945>

RIGHT:

がいるものとみられる。この間、6頭が出生したが、うち3頭が乳児死亡、ほかに死亡や群れ落ちがあって、ポピュレーションの変動は少ない。第1位リーダーは20余才のナベであるが、マキを中心として別行動をとるグループがいる(1979年8月時の約7頭から、1980年8月時の約18頭まで、グループが大きくなっている)。

サルへの給餌は個体確認や体重測定時のほかはなるべく差し控えており、そのため、餌づけされた群れとしては、自然状態の行動をよく保持した状態に保たれている。幸島に生息しうるサルの総数は100頭までが適当と考えているが、現在のところ、特に栄養状態の悪化は見られない。

なお、本施設設立以前より多年にわたり、ニホンザル幸島群の研究者がお世話になってきた漁師の磯崎政富氏が1980年2月16日朝、突然逝去された。記して御冥福をお祈りする次第である。

1979年秋の台風で施設内の仮設小屋が崩壊する等の被害を受けたが、年度末までに大体の復旧が行われた。従来より研究者に切望されている宿泊、研究整理等のための建物増築を含め、1980年度内になお、施設の整備をはかって行きたい。台風等による影響として、施設がわと幸島との間の陸続きの頻度、程度が減少しており、1980年度は渡島に船を使用する率が増加する見込である。

1979年度の研究関係の来訪者は98名、延べ655日であった。なお、施設常駐の森明雄助手は1979年8月以来、西アフリカへ研究調査のため1年間の予定で出張中であり、施設には山口直嗣、冠地富士男の両技官のほか、囑託(非常勤講師)の三戸サツエが常駐している。

研究概要

- 1) Mori, A. (1979): An experiment on the relation between the feeding speed and the caloric intake through leaf eating in Japanese monkeys. *Primates*, 20: 185-195.
- 2) Mori, A. (1979): Analysis of population changes by measurement of body weight in Koshima troop of Japanese monkeys. *Primates*, 20: 371-397.

サル類保健飼育管理施設

千葉敏郎・松林清明¹⁾
後藤俊二・松林伸子

前年度の年報(Vol. 9, 1979)で報じたように、昭和54年度概算要求において繁殖コロニー設置が認められた。要求案の骨子は前報に述べたからここでは省略する。予算が内示されたのは54年3月頃であるが、これに僅かに先立って、繁殖コロニー実行委員会(委員長・千葉敏郎)が所内に設けられ、コロニー建設の基本的実施計画の策定に当たることになった。この委員会はその後、所内の各種委員会とも協議を重ね、さらに実施計画案の大要について全所員に対する説明会を開くなどして、研究所周辺地域に対する影響をも含めた環境問題、将来建設予定の情報資料センターとの関係などについても多数の意見を徴しつつ最終的プランの確定につとめた。この間に、京大本部との頻繁な交渉が行われたことは勿論である。結局、最終案として繁殖母群放飼場(総面積2,437 m^2)を4区画に分けてここに総数約120頭のアカゲザル・ニホンザルを収容し、ここで生まれた子ザルを育成舎(総面積528 m^2)に移し、集中的に管理することに落ち着いた。着工は当初10月初が予定されていたが、諸事情により大巾に遅れ結局12月下旬に至って本格的工事が始まった。それに伴い完成予定も、当初の3月末が55年6月に延期され、竣工検査が行われたのは6月23日であった。

研究用サルの自家繁殖態勢の充実、殆ど研究所開設の時点以来、いわば積年の願望であったが、ここに少なくともその容れ物だけは成った訳である。今後どのようにしてその中身を調達し、いかにしてこれを充実・発展せしめるかが、実はより大きな困難な課題であることは言う迄もない。年毎に60頭の健康な子ザルを育成し、これを確実に研究用に供するようになる迄には、少なくとも後数年間を要する筈である。幸いにして、コロニー新設に伴って技官定員の1名増加と、運営費の増額も認められたので、大いに奮起して今後の発展を期したい。

科研費によって購入されたサルの総数は、総保

1) 教務職員

有頭数の約12%に達しているが、それに伴って、科研費購入サルを研究遂行上己むを得ず所外に移動しなければならないような事態も出来つつある。本来、本研究所内に飼育されるサルはその購入費の出所の如何を問わず、その移出入は必ずサル施設を経なければならず、また管理の責任もサル施設にあるのが原則である。従って上述の事態に対処するに当たっても、この原則に基づいた一定のルール、しかも研究の円滑な進展を妨げないようなルールを確立することが必要である。若しそのようなルールを欠いたまま、サルの所外への移動が自由に行われたとすれば、それはサル施設の運営のみならず、研究所そのものの根本的なあり方に対して、憂慮すべき影響を及ぼすことになるであろう。このような見地から、サル委員会は所外へのサルの移動に関する手続きを定め、協議員会にはかって承認を得た。このことの意義は決して小さくない筈である。また、同委員会は所内におけるサルの多重利用の円滑な推進を図るため、このことに関する実施細則を定め、これも協議員会によって承認された。

なお、附属施設長候補者選挙内規の改正が行われ、施設職員の意向がより合理的な形でこの選挙に反映されることになった。

昭和54年度サル施設経費概算

項 目	金 額(千円)
備 品 費	1,381
サル類購入費	900
サル飼料購入費	7,650
薬 品 費	754
消 耗 品 費	1,652
人 件 費	5,929
補修・改造等工事費	879
雑 費	491
計	19,636

研究概要

1) ニホンザルの精子形成における季節的変動

千葉 敏 郎

高崎山・宮島・志賀高原C群について、精子形成の季節的変動を観察し、その成績を学会、雑誌

に発表した。さらに、実験室長期飼育群についても同様な観察を行い、上記の野外群と比較し、その成績を学会において発表した。

2) ニホンザルの精液性状に関する研究

松 林 清 明

電気刺激法で採取した精液材料につき、その物理的及び化学的性状の年令・季節変動を検討している。

3) ニホンザル雄性生殖器官の活性変動に関する組織学的研究

松 林 清 明

精巣及び副生殖腺の組織所見の年令的・季節的变化を光顕レベルで観察している。

4) 霊長類の眼底像に関する基礎的研究

後 藤 俊 二

ニホンザルを主としたマカク類の生長に伴う眼内視所見の推移について、通常及び赤外フィルムを用いた単色光撮影法による眼底観察及び硝子体動脈系等前眼部の変化についての観察を行なっている。

5) ニホンザルの奇形に関する実態調査

後 藤 俊 二

共同研究として、四肢奇形の形態観察、臨床検査等を進めている。また内臓奇形の有無についての観察も行う予定。

論 文

- 1) Tiba, T. (1980): Jahreszeitliche Schwankung in der Spermatogenese beim free-ranging Japanischen Makak (*Macaca fuscata*). Zool. Anzeig., in press.
- 2) Nigi, H., Tiba, T., Yamamoto, S., Floesheim, Y., Ohsawa, N. (1980): Sexual maturation and seasonal changes in reproductive phenomena of male Japanese monkey (*Macaca fuscata*) of the Takasakyama troop. Primates, in press
- 3) Yoshihiro, S., S. Goto, M. Minezawa M. Muramatsu, Y. Saito, H. Sugita. H. Nigi (1979): Frequency of Limbs in the Japanese Monkey. Ecotoxcol. envir. Safety, 3, 458-470

第89回日本獣医学会(1980)

3) ニホンザルの電気射精

松 林 清 明

第88回日本獣医学会(1979)

報告その他

1) 後藤俊二・松林清明・千葉敏郎・和 秀雄・谷口威夫(1980): ニホンザル志賀C群における臨床検査成績。昭和54年度文部省科学研究費補助金一般研究(A)研究成果報告書pp25-33

1979年度(昭54年)サル移動状況

昭和54年度(1979)末飼育頭数

区 分 種 名	入 荷			出 産	管 理 換	実 験 殺	事 故 死	管 理 不 良	結 核 殺	死 亡					種 名	飼育頭数
	校 費	科 研 費	寄 附							呼 吸 器 系	消 化 器 系	代 謝 器 系	そ の 他	不 明		
コモンツパイ				5						2				2	コモンツパイ	6
スローロリス										1					ワオキツネザル	2
ワタボウシタマリン				8		15				2					スローロリス	2
シルバーマーモセット							1						1		オオギャラゴ	6
リスザル											1				ヨザル	5
ヨザル				1			1								ワタボウシタマリン	13
ニホンザル	3	2	37	25		37	1	2		3	2	1	1	2	シルバーマーモセット	5
アカゲザル	24		16	11	8	21	4	1	1(1)	1	4(1)			2	リスザル	4
タイワンザル			4	5		3				1					ノドジロオマキザル	1
ブタオザル			1			1	1				1				フサオマキザル	2
ベニガオザル						3									チュウベイクモザル	1
ボンネットザル				4		3					1			1	ミドリザル	2
カニクイザル			1			2				1					パタスザル	2
アッサムザル						1	2								アカゲザル	135
マントヒヒ				1						1					ニホンザル	239
ゲラダヒヒ			2												ヤクザル	17
チンパンジー			1(1)												M.f.f×M.f.y	2
小 計	27	2	62(1)							12	9(1)	1	2	7	タイワンザル	27
合 計		91 (1)		60	8	86	9	4	1(1)		31	(1)			ブタオザル	8

注) 寄 附: ()印 借受け
 管理換: 他大学へ
 死 亡: ()印 検疫中死亡

総増加数－総減少数＝差引数
 151－139＝12
 (昭53年度より12頭増加)

合 計	528
-----	-----